

イザヤ書54-57章「神の癒しと回復」

1A 神の変わらない愛 54-55

1B イスラエルの回復 54

1C 不妊の女の多産 1-10

2C 慰めを受ける都 11-17

2B 恵みの招き 55

1C 無代価の食糧 1-5

2C 豊かな罪の赦し 6-13

2A 義の備え 56-57

1B 義の中に生きる待望 56

1C 万民の祈りの家 1-8

2C 貪欲な犬 9-12

2B 聖なる所 57

1C 偶像の祭壇 1-13

2C へりくだる者への癒し 14-21

本文

前回私たちは、神が選ばれたしもべの働きのクライマックスの部分学びました、人としてさげすまれるところまでご自分を低くされました。それだけでなく、何と他の人々の罪と咎を代わりに受けるところまで低くされたのです。その結果、義とみなされる人々、神の子供となる権利が与えられる人々が数多く出てきます。そして 53 章の最後の節を前回、触れなかったので、それをまず読みたいと思います。

53:12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。

キリストに与えられた分捕り物には、悪の勢力がありました。悪魔を始めとする勢力は、人々を罪の下に閉じ込め、死の恐怖に縛っていました。しかし、主はそれをご自分の死によって打ち砕かれたのです。「コロサイ 2:15 神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」それができたのは、イエス様がご自身を代価にして命をお捨てになったからです。そして今、「そむいた人たちのためにとりなしをする」とあります。主は今、神の右の座におられて、執り成しをしておられます。ご自分のなされたことを今も、まだ知らないで神に罪を犯している者たちのためにも届けようとされています。

そしてイザヤ書 54 章を見てください。今日は 57 章まで学びたいと思いますが、57 章でイザヤ書後半の「しもべの働き」の部分を終えます。主のしもべが行なったことによって、イスラエルとその都エルサレムが回復し、深い慰めを受けるところを読んでいきます。

1A 神の変わらない愛 54-55

1B イスラエルの回復 54

1C 不妊の女の多産 1-10

54:1 「子を産まない不妊の女よ。喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ。喜びの歌声をあげて叫べ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ。」と主は仰せられる。
54:2 「あなたの天幕の場所を広げ、あなたの住まいの幕を惜しみなく張り伸ばし、綱を長くし、鉄のくいを強固にせよ。54:3 あなたは右と左にふえ広がり、あなたの子孫は、国々を所有し、荒れ果てた町々を人の住む所とするからだ。54:4 恐れるな。あなたは恥を見ない。恥じるな。あなたははずかしめを受けないから。あなたは自分の若かったころの恥を忘れ、やもめ時代のそしりを、もう思い出さない。54:5 あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。54:6 主は、あなたを、夫に捨てられた、心に悲しみのある女と呼んだが、若い時の妻をどうして見捨てられようか。」とあなたの神は仰せられる。

1 節の「この夫に捨てられた女」とは、イスラエルのことです。イスラエルが、神が約束してくださった子孫による繁栄を一時、失いました。アッシリヤによって北イスラエルは捕え移され、南ユダはバビロンの捕囚の民となりました。けれども最後には、これまで問題なく子を産みつづけた普通の女よりも遥かに多くの子孫を生み出す、という約束を神はしてくださっています。これまで祝福されてきた異邦人の国々よりも、さらに多くの祝福があるということです。2 節には、天幕を広げる話がありますが、これは今でも中東にはベドウィン、遊牧民がいますが、家族の数が多くなってテントが手狭になったら、その幕を継ぎ合わせてさらに大きく張り伸ばします。このように、イスラエルは子孫が増えて自分たちが住むところを広げていくという約束を、神は与えてくださっています。

ちょうどこれはハンナの時のようです。ハンナは不妊の女でした。エルカナのもう一人の妻ペニナは子を産みました。ハンナはもだえて、主の幕屋において声にならない祈りをささげました。そうしたらサムエルが生まれました。さらに後に、息子や娘が生まれました。サムエルが生まれた後にハンナがささげた祈りで、「不妊の女が七人の子を産み、多くの子を持つ女が、しおれてしまいません。(1サムエル 2:5)」と言っています。

このように、主は後の日に、イスラエルにとてつもない回復を約束されています。ローマ 11 章を開いてください。パウロは、多くのイスラエル人が福音を拒んでいる状態にあることについて、「彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか。絶対にそんなことはありません。(11 節)」と言っています。そして続けてこう言っています。11 節です、「かえって、彼らの違反によって、救いが異

邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。」彼らが福音を信じないことによって、神の救いの御手は異邦人にまで伸ばされました。12 節を読んでください。「もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。」初代教会以降、異邦人の間で数多くキリストを信じる者が起こされ、祝福されました。しかし回復の時がきます。異邦人の救いはすばらしいですが、元々救いの約束が与えられていたイスラエルの民は、なおのことすばらしい救いを手にするということです。

54:7 「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。54:8 怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う主は仰せられる。54:9 「このことは、わたしにとっては、ノアの日のようだ。わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓ったが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めない」とわたしは誓う。54:10 たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれむ主は仰せられる。

イスラエルが神の怒りを受けて捨てられたようになっていた期間は、「ほんのしばらくの間」と主は言われています。バビロン捕囚は 70 年間、そしてエルサレムがローマ軍によって破壊された紀元 70 年から現在まですでに 2000 年近く経っています。けれども、神にとっては「ほんのしばらくの間」なのです。なぜなら、その後続く永遠という期間は、非常に長いからです。この後に来るとてもない祝福、神の憐れみは、これまで受けてきた虐げを「あれは、ほんのしばらくの間だったね」と認めることができるほど実に長い期間、そして豊かな時としてくださるからです。

そして主は、ノアの時代の洪水の後に結ばれた契約を思い出し、同じようにイスラエルに対する契約を忘れることはなく、無効にされることはないと言っておられます。これが契約というものです。主は決して見捨てられない、それは主のしもべたるキリストが、私たちの罪や咎のために身代わりになられるほどの苦しみの中にその強い意図が証明されています。

2C 慰めを受ける都 11-17

54:11 「苦しめられ、もてあそばれて、慰められなかった女よ。見よ。わたしはあなたの石をアンチモニーでおおい、サファイヤであなたの基を定め、54:12 あなたの塔をルビーにし、あなたの門を紅玉にし、あなたの境をすべて宝石にする。54:13 あなたの子どもたちはみな、主の教えを受け、あなたの子どもたちには、豊かな平安がある。

今ここで、エルサレムの都が宝石で飾られる預言をイザヤは行なっているのですが、ちょうど男に良いようにもてあそばれた女が、回復して、宝石を自分の身に飾っている姿です。黙示録 21 章の天のエルサレムは、実際に、宝石の輝きを持っている都であります。そして、そこに住む人々の

特徴は第一に主の教えを受けています。その結果、豊かな平安があります。主の教えを受けるといのは、なんと豊かな平安を私たちにもたらししてくれるのでしょうか。教えを受けるとは、養われ、また訓練を受けることですから、時に辛いと思うことがあります。しかし、それでもこれこそが平安の道ですね。「ヘブル 12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

54:14 あなたは義によって堅く立ち、しいたげから遠ざかれ。恐れることはない。恐れから遠ざかれ。それが近づくことはない。54:15 見よ。攻め寄せる者があっても、それはわたしから出たものではない。あなたを攻める者は、あなたによって倒される。54:16 見よ。炭火を吹きおこし武器を作り出す職人を創造したのはわたしである。それをこわしてしまう破壊者を創造したのもわたしである。54:17 あなたを攻めるために作られる武器は、どれも役に立たなくなる。また、さばきの時、あなたを責めたてるとんな舌でも、あなたはそれを罪に定める。これが、主のしもべたちの受け継ぐ分、わたしから受ける彼らの義である。・・主の御告げ。・・」

14 節にある「義」というのは、主の与えてくださるところの義、賜物としての義です。その義によって堅く立ちなさいと主は励ましておられます。私たち信仰者の戦いと、エルサレムの住民の戦いは似ています。そこに攻めてくる者たちがいます。武力でまた口頭で中傷という形で攻めてきます。しかし、私たちはキリストにある神の義を見にまわっている必要があるのです。イスラエルの場合は、主が敢えてバビロンを用いられてそれを裁かれました。しかし、それは主がそう行なわれたからであり、義の賜物を与えられた今は恐れる必要はないのです。「ローマ 8:31-34 では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。」

2B 恵みの招き 55

このようにして、主はイスラエルに回復の約束をしてくださいました。しかし、約束をされることには必ず、恵みをもって応答する責任が聞いている者たちにあります。約束されたから自動的にその約束に預かれるのではありません。主の用意してくださった恵みに対して、恵みをもって受け入れなければいけません。その勧めが 55 章にあります。

1C 無代価の食糧 1-5

55:1 ああ。渴いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。55:2 なぜ、あなたがたは、食糧にもならない物のために金を払い、腹を満たさない物のために労するのか。わ

たしに聞き従い、良い物を食べよ。そうすれば、あなたがたは脂肪で元気づこう。

渴いている者、腹を空かせている者というのは、霊的に渴いている者、事欠いている者ということです。イエス様は黙示録の最後で、「渴く者は来なさい。命の水がほしい者は、それをただで受けなさい。(22:17)」と言われましたが、そのまま主のところに来れば、良き物を与えてくださいます。ところが数多くの方が、それ以外のところでその渴きをいやそう、腹を満たそうとします。サマリヤの女がそうでした、男に自分の渴きを満たそうとしていました。そして気づいていないことは、そのような努力には、多くの費用がかかっていることです。徒労に終わるのですが、私たちは何か自分ですることによって得ようとするのです。しかし、そうではない、神の恵みを、自分も恵みをもって受けるという勇気が必要です。そこには、へりくだりが必要です。自分でやっていくのだという自負心が、恵みをもって受けることの邪魔になるからです。

55:3 耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたととこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。55:4 見よ。わたしは彼を諸国の民への証人とし、諸国の民の君主とし、司令官とした。55:5 見よ。あなたの知らない国民をあなたが呼び寄せると、あなたを知らなかった国民が、あなたのところへ走って来る。これは、あなたの神、主のため、また、あなたを輝かせたイスラエルの聖なる方のためである。

これは、かつてダビデに主が約束してくださった、ダビデの王座からメシヤが出てきて神の国を建てるという約束です(2サムエル 7:12-16)。ここで強調されているのは、「とこしえの契約」「変わらない愛の契約」です。主は途中で、この契約を破棄して見捨てるようなことはしないという意図を示しておられます。

そして、ここで主は異邦人がこの救いに加わることを示しておられます。「あなたを知らなかった国民が、あなたのところへ走って来る。」とあります。主はイスラエルを選ばれ、そのイスラエルからキリストにあつて異邦人も神の国に招き入れるということです。私は、聖地旅行に行くときちょっと不思議な気分になります。それは、まるで違う文化圏と気候や地形のところにおいて、人種的にも全く異なる民族と国ですね。日本人が海外旅行に出るなら、欧米、東南アジア、豪州、他にもいろいろの国がありますが、中東でもトルコやエジプトならば行く人がいるのではないのでしょうか。しかし、「イスラエル？」と思われれます。それがここでの意図です、主は普通なら合わない人々、イスラエル人たちも知らない国民を、ご自分の国の中に招き入れておられるということです。

2C 豊かな罪の赦し 6-13

55:6 主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。55:7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

午前礼拝で話したように、主の下さる罪の赦しは豊かなものなのだとことを知る必要があります。「1ヨハネ 1:7 御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」今のありのままの姿で、そのまま主のところに来なければ、その豊かさにあずかることはできません。だから、今、来なさいという招きをしているのです。

55:8 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。…主の御告げ。…55:9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

神の恵みには、神の主権が働いています。私たちが何かしたからという人間的な要素は全くなく、神ご自身がただ好意を寄せたいから、私たちは神の好意を受けます。そのために、私たちの考えることと、神の思いは大抵、異なります。自然に私たちの考えることとは反対にさえ見える働きを神は行なわれて、恵みを示されます。神は、弟を兄よりも選ばれました。イシュマエルではなくイサク、エサウではなくヤコブを選ばれました。しかも、ヤコブに至ってはどうしても好意の持てない人物です。野外に出て、猟をして、おまけに獲物をおいしく料理できるエサウのほうが、そりゃあ人々に好かれるでしょう。ところが主はヤコブを選ばれました。そして初代教会においては、ペテロの思いとは違って異邦人のコルネリオが救いにあずかりました。パウロが小アジアだけの宣教に満足していたのに、御霊はそれを禁じられヨーロッパへの宣教に導かれました。私たちが考えるよりもずっと高いところで神は考えておられるので、私たちの思いと主の思いは往々にして異なるのです。

そしてその主の思いは、肯定的なものです。私たちの願うことをかなえてくださるのですが、私たちが、こうやったら願いがかなえられると思っていることよりも異なる方法で、願っていること以上をかなえてくださいます。「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことができる方に」とパウロは、エペソ人への手紙で言っています(3:20)。

55:10 雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

誰でも認めるところです。雨や雪が天に戻ることはありません。戻りはしますが、それは必ず地上に降って、それから地を潤したあとに循環して戻ります。必ず、潤いと実りをもたらすという結果を知っています。それと同じように、神の言葉も空しくは帰ってきません。この約束をもって、私たちは福音の言葉と、神の言葉を語っています。信仰をもって聞いた人々が、思いが変えられ、その生活が変えられ、その言葉がその人のうちで実現していくのを証しすることができます。

55:12 まことに、あなたは喜びをもって出て行き、安らかに導かれて行く。山と丘は、あなたがたの前で喜びの歌声をあげ、野の木々もみな、手を打ち鳴らす。55:13 いばらの代わりにもみの木が生え、おどろの代わりにミルトスが生える。これは主の記念となり、絶えることのない永遠のしるしとなる。」

主が語られたことは、その通りになりますが、ここの言葉もその通りになります。イスラエルは、ダビデに約束されたように神の国となりますし、そしてそこには人々が集められるだけでなく、このように自然も変えられます。イスラエルだけでなく、世界がこのようにエデンの園のようになります。アダムが罪を犯したので、いばらが土地から生えるようになりました。しかし、キリストが罪のために死なれたので、同じように自然界を神は回復してくださいます。

2A 義の備え 56-57

そして主は、神からの救いを得るために、ご自分の義の中に留まっていなさいという勧めを 56 章以降で行われます。

1B 義の中に生きる待望 56

1C 万民の祈りの家 1-8

56:1 主はこう仰せられる。「公正を守り、正義を行なえ。わたしの救いが来るのは近く、わたしの義が現われるのも近いからだ。」

主が私たちを救ってくださる、主の義が現れることが近いことを知って、私たちは何をすべきでしょうか？「主がどっちみち救ってくださるのだから、私たちは気ままに生きていけばいいや。」ということでしょうか？違います。むしろ主が救ってくださるのだから、私たちはキリストの義を身に付けるべきです。パウロが近づいている救いについて、ローマ 13 章 11 節からこう言っています。「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。(11-14 節)」

56:2 幸いなことよ。安息日を守ってこれを汚さず、どんな悪事にもその手を出さない、このように行なう人、これを堅く保つ人の子は。

義を行なうことについて、その一例として安息日を守ることを主は言われています。なぜか？ユダがバビロンに捕え移されるその理由の一つが、安息を守っていなかったことがあるからです。レビ記に土地の安息についての教えが書かれています。七年に一度、土地を一年休ませなさいとい

う命令です(25:2-4参照)。ところが彼らは土地を休ませませんでした。彼らがバビロンに捕えられていた70年間、土地は安息を得ることが出来たと、歴代誌第二の最後に書かれています。

安息日とは何か？それは主が六日で創造の働きを終わらせ、七日目に休まれたことを記念する日です。それで、「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」と主は言われました。主を覚えるために、自分たちも今行なっていることを一時やめて、主を覚えます。今、私たちはモーセの律法の中にある安息日にはいけないこと、そうした戒めを守る必要はありません。キリストが安息日の本体であり、既にキリストが現れたからです(コロサイ3:16-17)。けれども、主を覚えるために立ち止まるということ、キリストがなされた業を覚えていつも行なっていることを止めるということ、この原則は今も変わっていません。主を覚えるからこそ、他の悪事に手を出さないことができます。

56:3 主に連なる外国人は言うてはならない。「主はきっと、私をその民から切り離される。」と。宦官も言うてはならない。「ああ、私は枯れ木だ。」と。

主は、ご自身の名で祈り、礼拝を捧げることのできないとされていた者たちに対して語りかけておられます。申命記23章1節によると、去勢をしている者や異邦人が主の集会に加わってはならないという命令があります。エルサレムの礼拝のところまで行くのですが、外庭は誰でも入ることができますが、異邦人に対して、「そこから中に入るには死も覚悟しなければいけない」但し書きの表札がありました。そして宦官については、使徒の働きでエチオピアの宦官のことを思い出します。彼はエルサレムに巡礼に行ってきたのですが、その中にまで入って礼拝した訳ではなかったのでしょう。疎外されていました。

56:4 まことに主はこう仰せられる。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶ事を選び、わたしの契約を堅く保つ宦官たちには、56:5 わたしの家、わたしの城壁のうちで、息子、娘たちにもまさる分け前と名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。56:6 また、主に連なって主に仕え、主の名を愛して、そのしもべとなった外国人がみな、安息日を守ってこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、56:7 わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。56:8 ..イスラエルの散らされた者たちを集める神である主の御告げ。..わたしは、すでに集められた者たちに、さらに集めて加えよう。」

宦官に対しては、自分のことを「枯れ木だ」と言って子がいなかったことを嘆いていましたが、主の家の中に入ることが終わりの日にはできるようになる。そして、それは子を産むことよりもはるかにすぐれた祝福なのだ、ということです。すばらしいですね、これがキリストの福音がしてくれたことです。どんなに障害があろうとも、社会的に疎外されているようであっても、人生に負い目を持っていたとしても、主の恵みはそのような負い目を持っていない人以上の祝福と栄誉を、礼拝をする者

に与えられるということです。

そして外国人も同じように、終わりの日には異邦人の庭というものは存在せず、中に入って共にいけにえを捧げることができるのだということです。このように主は、隔ての壁を取り除いてくださいます。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。(エペソ 2:14)」ちなみにイエス様は、宮清めをされた時に子この箇所を引用して、神殿の敷地は祈りの家でなければいけないと言われました。そして8節ですが、そこにはエルサレムに集められるのが、イスラエルの民のみならず、さらに異邦人を集めるとあります。このように、心で神を信じている者は、彼が異邦人であってもその信仰によって清めてくださるという恵みがあるのです。

2C 貪欲な犬 9-12

そして、キリストの義を身にまとい、聖なる所に来るというすばらしい恵みを教えましたが、イザヤが生きているのは、現実のはその正反対の出来事が展開していました。彼は今、そこに目を向けます。指導者たちの不正や腐敗について、イザヤは話題を変えています。

56:9 野のすべての獣、林の中のすべての獣よ。食べに來い。56:10 見張り人はみな、盲人で、知ることがない。彼らはみな、おしの犬で、ほえることもできない。夢を見て、横になり、眠りをむさぼっている。56:11 この貪欲な犬どもは、足ることを知らない。彼らは、悟ることも知らない牧者で、みな、自分かってな道に向かい、ひとり残らず自分の利得に向かって行く。56:12 「やって來い。ぶどう酒を持って來るから、強い酒を浴びるほど飲もう。あすもきょうと同じだろう。もっと、すばらしいかもしれない。」

獣が羊たちを襲って來ようとしています。羊飼いが貪欲な犬のように自分の欲に仕えているということを糾弾している箇所です。

2B 聖なる所 57

1C 偶像の祭壇 1-13

57:1 義人が滅びても心に留める者はなく、誠実な人が取り去られても、心に向ける者もない。まことに、義人はわざわざいから取り去られて、57:2 平安にはいり、まっすぐに歩む人は、自分の寢床で休むことができる。

義人が取り去られる時が來ます。主が、ご自分が來られるのはノアの日のようだ、と言われました。「洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついたりしていました。そして、洪水が來てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が來るのも、そのとおりです。そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとり残されます。ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとり残されます。(マタイ

24:38-41)」そして聖書には、義人が死ぬ、あるいは生きていた時にそのまま天に移されることも啓示しています。神とともに歩んでいたエノク、そして火の戦車によってエリヤは天に昇りました。そして終わりの日に、キリスト者らはラツパの音と天使の号令の下に一気に空中に引き上げられます。空中まで降りてこられた主に会うためです。そして天に引き上げられます。

そして義人が取り去られるということは、その国や民にとって大きな損失です。しかし、そんなことにも心に留めることはないというぐらいの墮落ぶりです。しばしば、携拳後、クリスチャンたちがこの地上にいなくなって、それで人々が主に目を向けるのではないかさすがに、という話がありますが、ここによるとそうではないようです。義というのは、どんなにそれが貴いものでも、イエスご自身が言われたように、「豚に真珠」なのです。気に留めません。けれども、義人たちにとっても、地上から取り去られたほうが、幸せであります。この地上に災いを見ることなくして、天にある主のご臨在の中で休むことができます。

57:3 しかし、あなたがた、女ト者の子ら、姦夫と遊女のすえよ。ここに近寄れ。57:4 あなたがたは、だれをからかい、だれに向かって口を大きく開いて、舌を出すのか。あなたがたはそむきの子ら、偽りのすえではないか。57:5 あなたがたは、櫛の木の間や、すべての生い茂る木の下で、身を焦がし、谷や、岩のはざままで子どもをほふっているではないか。57:6 谷川のなめらかな石がおまえの分け前、そこいらの石が、おまえの受ける割り当て。それらに、おまえは、注ぎのぶどう酒を注ぎ、穀物のささげ物をささげているが、こんな物で、わたしが慰められようか。57:7 そびえる高い山の上に、あなたは寝床を設け、そこにも、上って行ってあなたはいけにえをささげた。57:8 あなたは、とびらと柱のうしろに、あなたを象徴する像を置いた。あなたはわたしを捨てて、裸になり、寝床に上ってそれを広げ、彼らと契りを結び、彼らの寝床を愛し、その象徴物を見た。

イスラエルの民が行っていたのは、ヨシュアたちが約束の地に入る前にカナン人たちが行っていた忌まわしい慣わしのことです。緑が生い茂っているところで偶像を据えて、いけにえを捧げて、そして性的に淫らなことを行っていました。そして望まぬ妊娠をするのですが、そのようなところで乳児をいけにえに捧げます。エルサレムの神殿という聖なる所とは裏腹に、谷川のなめらかな石がお前たちの分け前、と主は言われています。

57:9 あなたは油を携えてモレクのところまで旅し、香料を増し加え、あなたの使者たちを遠くまで送り出し、よみにまでも下させた。57:10 あなたは、長い旅に疲れても、「あきらめた。」とは言わなかった。あなたは元気を回復し、弱らなかつた。

生まれた赤ん坊を人々はモレクの像にささげていたのですが、そのモレクはモアブ人とアモン人が拝んでいたものです。そこまで彼らはわざわざ出て行き、贈り物を携えていったのです。そして使者たちも送り、その中で死ぬ人もいました。それにも関わらず、彼らはあきらめなかつたのです。罪の生活を送っていると、こういうことをします。もうこの生活はうんざりだと思っていなくても、そしてそ

の生活を送るために多くの犠牲を払っていることを知っていても、それを意固地になって止めようとしないのです。

57:11 あなたは、だれにおじけ、だれを恐れて、まやかしを言うのか。あなたはわたしを思い出さず、心にも留めなかった。わたしが久しく、黙っていたので、わたしを恐れないのではないか。

57:12 わたしは、あなたの義と、あなたのした事どもを告げよう。しかし、それはあなたの益にはならない。57:13 あなたが叫ぶとき、あなたが集めたものどもに、あなたを救わせよ。風が、それらをみな運び去り、息がそれらを連れ去ってしまう。しかし、わたしに身を寄せる者は、地を受け継ぎ、わたしの聖なる山を所有することができる。

11 節の「わたしが久しく、黙っていたので、わたしを恐れない」というのは、とても大事です。主が黙っているように自分で思って、それで勝手に自分の拝みたいものを拝む、自分の道を選んでいきます。では、あなたが困った時に本当にそれが自分を救うのですか？と尋ねてみればよいのです。しかし、その時には一切役に立ちません。

そして主は、「しかし」という言葉で再び、一気に希望を語られます。「わたしに身を寄せる者」です。再び 55 章に出てきた、神の恵みのところに来る人のことです。その人には、二つの約束があります。一つは、「地を受け継ぐ」ことです。神の支配するところになったその国を受け継ぎます。それから、「聖なる山を所有する」ことです。つまり、エルサレムの礼拝に参加することができるようになるということです。つまり、自分は主に身を避けることで、持つべきものを持つことができ、また神の臨在にあずかることができる、ということです。

2C へりくだる者への癒し 14-21

57:14 主は仰せられる。「盛り上げよ。土を盛り上げて、道を整えよ。わたしの民の道から、つまずきを取り除け。」

イザヤ書の中に、離散のユダヤ人が大路を通してエルサレムに歩いていく預言がありました(例:35:8-10)。そして今、その道を主が整えなさい、つまずきを取り除きなさいと呼んでおられます。そのつまずきとは、先に書いてある偶像礼拝であるとか、その他の悪事であります。

57:15 いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためである。

ここに、これまで読んできた、主の恵みの働きに対する私たちのあるべき態度が書いてあります。高く聖なる所に主が住まわれますが、そこに入るのは、自分の正しさを積み上げた者ではなく、「心碎かれて、へりくだった人」です。これまでどんな悪を行なったとしても、そのまま主の前に出て

いくのであれば、主はその全ての悪から私を清めてくださいます。そこに必要なのは、「へりくだり」です。自分の行ないを清めてから主の前に行こうとするとき、そこにはまだ、主の前へのへりくだりが足りません。そのまま心碎かれることによって、主が初めて住んでくださいます。私たちは、聖なる所に行くのであれば、自分が良くなってからと思います。しかし主は、「いいや、そのまま来なさい。」と言われるのです。

57:16 わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てるから。57:17 彼のむさぼりの罪のために、わたしは、怒って彼を打ち、顔を隠して怒った。しかし、彼はなおそむいて、自分の思う道を行った。57:18 わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。わたしは彼を導き、彼と、その悲しむ者たちとに、慰めを報いよう。57:19 わたしはくちびるの実を創造した者。平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼をいやそう。」と主は仰せられる。

主は、貪りの罪を犯した者、先ほど見たような偶像礼拝を行なった者、そうした者であっても、主は怒りを一時的に示される、つまり懲らしめられたとしても、必ず癒しと慰めを与えたいと願っておられます。ここの言葉を信じて、主の前にそのまま行きましょう。

57:20 しかし悪者どもは、荒れ狂う海のような。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。57:21 「悪者どもには平安がない。」と私の神は仰せられる。

この言いまわし、「悪者どもには平安がない。」によって大きな区切りとなっています。49 章から 57 章までが、主のしもべの姿、へりくだり、卑しめられ、身代わりとなって私の罪のために打ち碎かれた姿、そしてそこから出てくる慰めと癒しの言葉がありました。けれども、もしこれらのものを受け入れなければ、荒れ狂う海のようになってしまいます。そして、平安がありません。心に平安はないし、また主の裁きの中において、永遠に平安のない状態に置かれます。事実、悔い改めないで死んだ者たちは、ハデスの中、海の中にいることが黙示録 20 章にかかれています。

(もう一度、イザヤ 53 章 4-9 節を読む。)